北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
hue 国立大学法人 北海道教育大学 HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

日本人の敬語意識の実態に関する調査研究：札幌圏を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三上, 勝夫, 胡, 躍華 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004823

北海道教育大学紀要（第１部C）第48巻　第２号
Journal of Hokkaido University of Education (Section ⅠC) Vol. 48, No.2

平成10年２月
February 1998

日本人の敬語意識の実態に関する調査研究

―札幌圏を中心として―

三　上　勝　夫・胡　　羅　華

北海道教育大学札幌校教育方法学研究室

1　はじめに

現在，中国人がビジネスや留学，学術研究などを目的として，日本語を学ぶ機会は多い．これらの学習者に対して，多様な場面で日本人と接する際に実際に役立つ日本語を教えることは，日本語教育の基本である．

特に日本語の著しい特徴である敬語は，コミュニケーションの上で，人間関係をスムーズにする重要な役目を持っている．したがって外国人の日本語学習者が日本の社会に溶け込み，日本人の心を理解するのに，敬語の使い分けは不可欠であると言える．

敬語を的確に指導するためには，日本人の敬語意識，使用条件及び使用実態等を把握することが重要である．しかし中国における従来の敬語の指導は語彙と文法に偏りがちであった，と自らの体験を通して実感している．実際敬語に対する認識及び指導方法の研究がまだ不十分な状態で，中国人の教師たちは自分の主観的な判断や体験にたよる場合が少なくない．

敬語の指導に当っては，まず現代日本人の敬語意識と敬語使用の実態に基づかなければならない．敬語意識と敬語行動は社会の進展に伴い，変わってきているからである．近年，社会構造の民主化への転換と高度産業化に伴う都市化という社会変化によって，日本人の敬語に対する考え方にはどんな変化が起こっているか，とりわけ現在の日本社会で敬語がどのように意識され，使用されているのだろうか．この調査は，こうした課題意識に基づくものであり，外国人学習者に「どんな敬語を教えるべきか」という敬語指導のあり方を探るための基礎作業である．このような目的で，1996年12月，札幌市内及び近郊在住者885人を対象に「現代敬語に関する実態調査」を実施した．今回の報告は，このうち「敬語意識」の部分をまとめたものである．

2　調査方法

(1)　対象の選択

敬語はその社会的位相によって分化し，特徴を持っていると言われる．したがってビジネス敬語とか生活敬語とか学校敬語などに分けて考える必要がある．例えば，営利企業では敬語が発達している反面，家庭では敬語がむしろ使われなくなってきた．また，地域社会では都市化が進行するにつれて敬語使用が多様化して，上下関係よりも親疎関係に比重が移りつつある傾向が見られることなどである．これらの検証を目指し，職場・学校・地域社会を調査対象として選んだ．

札幌市内及び近郊在住者を対象に選んだ理由は札幌市が歴史的に固有の方言を持たず，共通語化の最も進んだ地域の一つであり，平均的結果が得られると仮定した．またこの地区には，1970年代に東京大学の柴田

表一1　調査対象，人数，回収率，北海道出身率，略称

類型			対象	人数	回収率(%)	北海道出身率(%)	略称
職場	企業	銀行	銀行員	59	83.3	100.0	企業甲
		建設会社	会社員	50	90.9	66.0	企業乙
	官庁	市役所	公務員	80	80.0	98.8	官庁丙
		大学事務局	事務官	56	86.2	89.3	官庁丁
学校	高校		高校生	206	100.0	95.6	高
	大学		大学生	210	100.0	89.5	大
地域社会			一般市民	224	93.0	87.1	地

武教授らが行なった調査データ（『続．都市化と敬語　昭和52年度札幌における敬語調査報告』東京大学敬語研究会　1982など）があり，20年間の変化も比較できるからである．

(2)　調査の内容及び形式

調査は「敬語意識」と「敬語行動」に分け，「敬語意識」については，所属する社会的類型（学校，職場，地域社会など）別に敬語に対する考え方，使用意識，敬語を使う時の場面や相手に対する判断など及び敬語の将来への展望について調査してみた．調査はアンケート方式で，対象者に調査票を配布し，記述回答を依頼して回収した．その回収率は表－１の通りである．

設問数及び設問形式は職場内の会社員，公務員向けは１～８まで８問である．学校と地域社会向けは１～12まで12問である．質問の内容と形式は妥当性と比較の便宜を考慮して，前記東京大学の調査及び平成７年度文化庁の「国語に関する世論調査」などの調査様式に準拠した．

「敬語意識」に関する各類型の問－１～３は対象者自身の敬語使いに対する自己評価，敬語の必要性及び敬語留意度を問うものである．学校と地域向けの問－４は敬語の選択条件についての設問である．学校，地域向けの問－12と職場向けの問－８は敬語の将来像への意見を問うものである．なお，抜けている設問番号は「敬語行動」の部分で，今回は取り上げない．また「集計表」の一部分（性別．年齢別など）は紙幅の都合で省略した．

［参考資料］

職場の問－１，２，８と学校，地域の問－２は『企業の中の敬語』（国立国語研究所報告73 1982年）を，学校，地域の問－１，４は『国語に関する世論調査』（文化庁文化部国語課1995年）を，学校，地域の問－12はＮＨＫ放送世論調査所『昭和54年９月国民世論調査 ――ことばに関する意識―― 結果表』をそれぞれ参考にした．

3　設問と結果の分析，考察

(1)　敬語使用についての自己評価（学校，地域向けの問－１）

◉設問，結果

あなたの考え方に最も近いものを一つ選んでください．　（選択肢：Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｄ．Ｅ，表－２参照）

この質問は敬語の使い方の意識について聞いたものである．平成７年文化庁『国語に関する世論調査』で

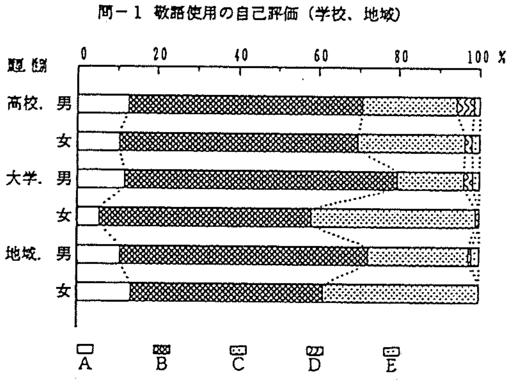
行なわれたものと同じ設問を札幌圏の人に出して，敬語の使い方を自己評価してもらい，敬語使用の状況を知り，あわせて地域差も考察してみたいと思った．

一番多かったのは「B．人並みに使っていると思う」が各類型ともほぼ同じ程度で，過半数を占めた．2

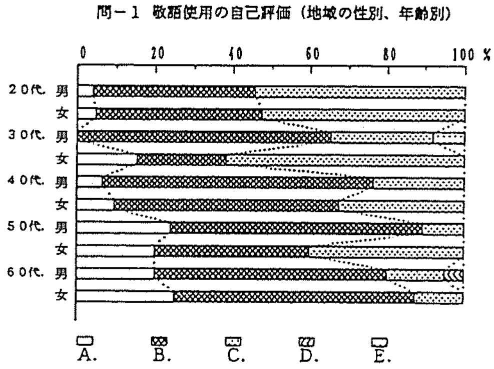
表－2　敬語使用の自己評価

表中数字は回答の実数、（ ）内数字は%を示す。(以下表については同様)

類型	性別	人数	A	B	C	D	E
			適切に使っていると思う	人並みに使っていると思う	使いたいと思うが、十分に使っていないと思う	使う必要を認めないし、実際ほとんど使わない	分からない
高校	男	93	12(12.9)	54(58.1)	22(23.7)	4(4.3)	1(1.1)
	女	113	12(10.6)	67(59.3)	30(26.5)	2(1.8)	2(1.8)
	計	206	24(11.7)	121(58.7)	52(25.2)	6(2.9)	3(1.5)
大学	男	85	10(11.8)	58(68.2)	14(16.5)	2(2.4)	1(1.2)
	女	125	7(5.6)	66(52.8)	51(40.8)	1(0.8)	0(0.0)
	計	210	17(8.1)	124(59.0)	65(31.0)	3(1.4)	1(0.5)
地域	男	128	14(10.9)	79(62.0)	32(25.0)	1(0.8)	2(1.6)
	女	96	13(13.5)	46(47.9)	37(38.5)	0(0.0)	0(0.0)
	計	224	27(12.1)	125(55.8)	69(30.8)	1(0.5)	2(0.9)



図－1



図－2

番目は「C．使いたいと思うが，十分に使っていないと思う」で，高は25%で，大，地各30%前後であった．3番目は「A．適切に使っていると思う」で，全体的に10%前後であった．そして「D．使う必要を認めないし，実際ほとんど使わない」と「E．わからない」はともに極めて少なかった．

◉分析，考察

① 「B」については，類型間にほとんど差がない．「A」，「B」を合計すると，高が70%，大が67%，地が67.9%となるが，これもほとんど差がない．これは敬語使用の能力の発達から見れば，意外な結果とも言える．その理由としては，高校生，大学生の生活の場が家庭と学校（年齢や生活形態が類似の同質集団）であり，社会経験が少ないので，「人並み」の評価をしていると思われる．「A」を選んだ高校生が多いことも同じ理由かと思われる．大学生の女性の「C」が高い理由として，上品さ，上昇志向，カッコヨサへの憧憬が背景にあるかもしれない．また，地域でも女性は「C」が高いのは，社交の円滑性や上品さ志向と考えられる．

② 地域社会に限って，性別，年齢別に見ると（図－2参照），敬語使いに自信を持っている人は年代が上がるにつれて増え，男女とも50代以上で20%以上を越えている．「C．使いたいと思うが，十分に使っ

ていないと思う」は若年層で高い傾向が見られる．20代男女とも過半数であり，30代の女性が60%を超えている．全体としては，男性より女性の方が割合が高い．

③　この設問の選択肢の「A」，「B」，「C」を合わせたものが程度はともかく「敬語必要論者」だとすると，ほとんどの人（高95.6%，大98.1%，地98.7%）は必要論者と言えるだろう．反面，「D」を「敬語不必要論者」とすると（高2.9%，大1.4%，地0.4%）本当に僅かである．

④　「適切に使っていると思う」と自信がある人は平均１割前後，「使いたいと思うが，十分に使っていないと思う」のあまり自信がない人は３割を占めていることから，日本人自身も敬語の使い方の難しさが十分わかっているようである．

⑤　この項目の結果は文化庁の前調査と比べて大きな違いが見られない．

(2)　職場敬語の必要性について（職場向けの問ー１）

◉設問，結果

職場で使われている敬語について，次の二つの意見の中からあなたの考えに近い方を選んでください．

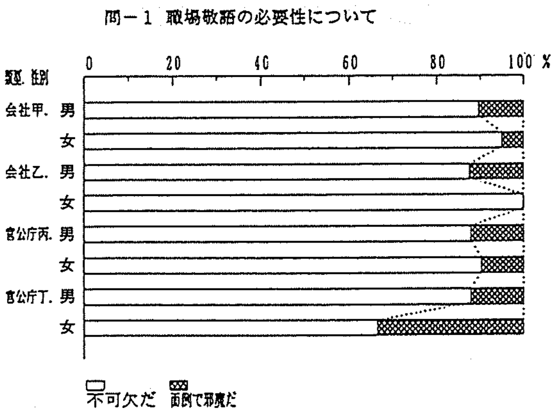
1．上下の規律が守れ，仕事を進めるうえで不可欠である．

2．固苦しく面倒でもあり，仕事のためにはかえって邪魔になる．

この質問は国立国語研究所が1975年～1977年に日立製作所で行なった調査の中で用いられたものである．今回同じ質問をする意図は20年前と現在の職場敬語意識とを比較検討したいからである．

表ー３　職場敬語の必要性

類型		性別人数	1. 不可欠だ	2. 面倒で邪魔だ
会社	会社甲	男 39	35(89.7)	4(10.3)
		女 20	19(95.0)	1(5.0)
		計 59	54(91.5)	5(8.5)
	会社乙	男 40	35(87.5)	5(12.5)
		女 10	10(100)	0(0.0)
		計 50	45(90.0)	5(10.0)
官公庁	官公丙	男 58	51(87.9)	7(12.1)
		女 21	19(90.5)	2(9.5)
		計 79	70(88.6)	9(11.4)
	官公丁	男 49	43(87.8)	6(12.2)
		女 6	4(66.7)	2(33.3)
		計 55	47(85.5)	8(14.5)



図ー３

①　表ー３と図ー３に示すように全体に「不可欠」と思う人が90%前後を示した．ただ，官公庁丁の女性だけが割に少ない．反対に，会社乙の女性は多い．

②　「不可欠」の回答率は官公庁より会社の方がやや高く見られる．

◉分析，考察

①　企業で敬語意識が高く，特に女性が高いのは予測どおりと言える．企業では来客（電話も）との応接態度は営利企業にとって重要な条件だからである．しかし官公庁では低い．同じ公務員でも市民サービ

スを業務とする所と，学生との応対が多い所では敬語の意識は異なる．特に官公庁丙の女性と，官公庁丁の女性では差が見られるが，これは丙が来客を目上と意識し，丁が学生を目上と見る必要がないためかと思われる．但し，両者の対象女性は少数なので考察には注意が必要である．

② 20年前，日立製作所での調査結果では，「不可欠」論の支持者は85.7%であった．今回の調査は前調査と同列に比較はできないが，会社内の敬語使用について，「不可欠」と思う人が増えている傾向が見られる．

(3) 敬語使用への気配りについて（共通の問－2）

◉設問

あなたは学校（地域）の生活の中あるいは職場で自分の敬語の使い方に気を配る方でしょうか．それとも無頓着な方でしょうか．

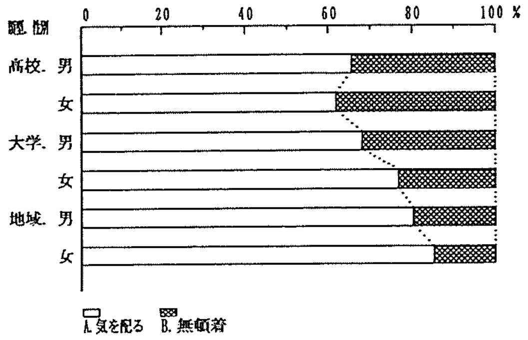
◉結果と分析，考察 (1)（学校，地域）

表－4 敬語への気配り

類型		性	人数	A. 気を配る方	B. 無頓着な方
学校	高校	男	93	61(65.6)	32(34.4)
		女	113	70(61.9)	43(38.1)
		計	206	131(63.6)	75(36.4)
	大学	男	85	58(68.2)	27(31.8)
		女	125	96(76.8)	29(23.2)
		計	210	154(73.3)	56(26.7)
地域	社会	男	128	103(80.5)	25(19.5)
		女	96	82(85.4)	14(14.6)
		計	224	185(82.6)	39(17.4)
会社	会社甲	男	39	32(82.1)	7(17.9)
		女	20	14(70.0)	6(30.0)
		計	59	46(78.0)	13(22.1)
	会社乙	男	40	37(92.5)	3(7.5)
		女	10	7(70.0)	3(30.0)
		計	50	44(88.0)	6(12.0)
官公庁	官庁丙	男	58	44(75.9)	14(24.1)
		女	22	17(77.3)	5(22.7)
		計	80	61(76.3)	19(23.8)
	官庁丁	男	50	34(68.0)	16(32.0)
		女	6	3(50.0)	3(50.0)
		計	56	37(66.1)	19(33.9)

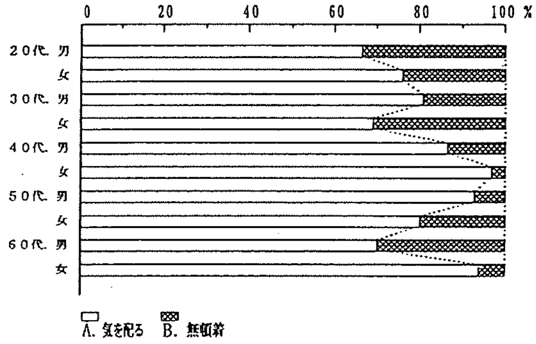
問－2 敬語への気配り（学校、地域）

図－4



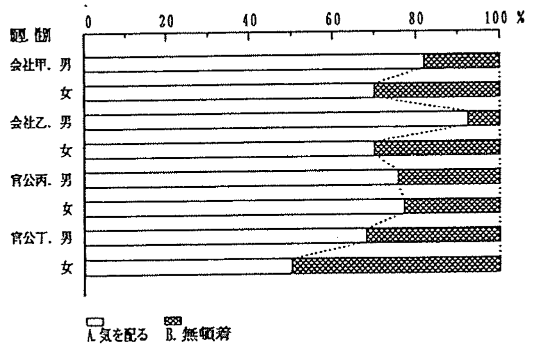
問－2 敬語への気配り（地域の性別、年齢別）

図－5



問－2 敬語への気配り（会社、官公庁）

図－6



①　表－4及び図－4に示したように「気を配る方だ」という回答は，高，大，地の順に高くなっていて，最も高かった地は80％以上となっている．その反面，「無頓着」の答えは高，大，地の順に減っている．

②　地の性別．年齢別（図－5）に見られるように男性は年齢が上がるにつれて「気を配る」が多くなる傾向が見られるが，60歳以上の男性は「無頓着」の方が増えてきている．女性は年齢の高低による一定の傾向は見られなかった．全体として，男性より女性は敬語についての留意度が高いと言えよう．

③　以上の結果から学校や地域社会の中では敬語への留意度は年齢が上がるにつれて高まることと，女性は男性より敬語に気を配る方が多いことは予想どおりであった．

◉結果と分析，考察　(2)（会社，官公庁）

①　表－4と図－6に示したように職場にいる会社員，公務員で，自分の敬語の使い方に気を配る人は会社乙が88％で1位である．会社甲は78％で1割低い．官公庁丙は76％で，丁はそれより1割低い．全体的に見れば官公庁より会社の方は「気を配る」人が多い．この結果は問－1（職場向け）の結果に近付き，営利企業の会社の方が敬語使用への留意度が高い．職務上の権限と厳しい責任を伴う職階制集団であることに起因すると思われる．また，会社乙が会社甲より高いのは会社の業務の違いによるものと思われるが，他に会社乙には北海道以外の出身者が多いことも多少関係があるかもしれない．

②　職場での性別を比較して見ると，全体に気を配る方は男性が高い．ただ官公庁丙は男女同じであった．特に官公庁丁の女性は低いのが目立つ．

③　この設問は国立国語研究所が1975年から三年間続けて日立制作所で行なったアンケート調査を参考にした．前調査は東京本社，工場事務，現場等各グループの回答には，「気を配る」の比率は平均61.7％であった．今回の調査対象は前調査と同列に比較はできないが，前調査より2割以上高いことがわかった．

◉結果と分析，考察　(3)（全体）

全体をみると，「気を配る」は会社乙(88.0％)，地(82.6％)，会社甲(78.0％)，官庁丙(76.3％)，大(73.3％)，官庁丁（66.1％），高（63.6％）という順になっている．職場敬語の留意度が高いのは予測どおりであるが，大学の事務局がやや低いことはサービス対象と関連するかと思われる．また，大は地よりも1割程度低く高よりも1割程度高いが，これは社会人への中間的成長階段を示すと言えよう．

(4)　気配りの順位（共通の問ー3）

◉設問

あなたは敬語を使うとき，どんな相手に特に気を配りますか．下から気を配る順位に答えてください．
（選択肢は類型によって異なるところがある．）

［学校，地域向け］	［職場向け］
A．相手の年齢	A．相手の年齢
B．相手の性別	B．相手の性別
C．相手の地位	C．相手の職階
D．相手の職業	D．入社時の先輩か後輩か
E．学校などの先輩か後輩か	E．相手との関係は親しいか親しくないか
F．相手との関係は親しいか親しくないか	F．その他
G．その他	

これは前問（問－2）で「気を配る」と回答した人のみに対する設問である．所属の違いによって，「気を配る」条件が変わるかどうかを調査目的とした．ここでは各類型1位の回答だけを取り上げる．

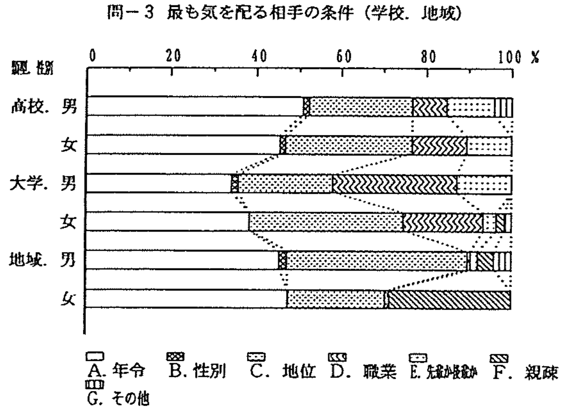
◉結果(1)（学校，地域）

① 表－5と図－7に示したように一番多いのが「A．相手の年齢」で，35%から50%となっていて，特に高の男性が最も高く，50．8%となっている．次が「C．相手の地位」で，各類型とも30%前後だが，地の男性は42．7%と最も高い．「B．性別」と「F．親疎」は全体に極めて少数である．

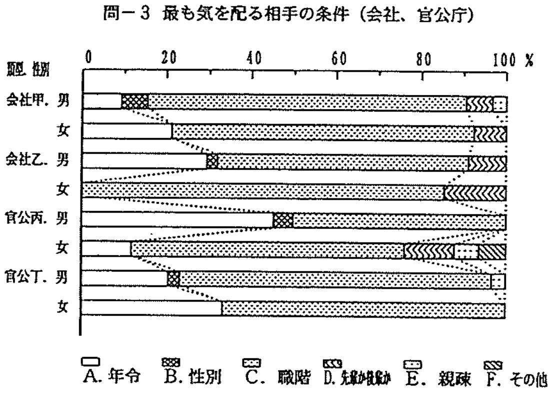
② 男女で比較してみると，大の女性が男性より「C．地位」は1割以上高く，反対に「D．職業」，「E．先輩か後輩か」は各1割低い。また地の女性は男性より「C．地位」は2割低く，反対に「F．親疎」が2割高くなっているのが特徴的である．

表－5　最も気を配る相手の条件（学校・地域）

類型	性別	人数	A	B	C	D	E	F	G
高	男	61	31(50.8)	1(1.6)	15(24.6)	5(8.2)	7(11.5)	0(0.0)	2(3.3)
	女	70	32(45.7)	1(1.4)	21(30.0)	9(12.9)	7(10.0)	0(0.0)	0(0.0)
校	計	131	63(48.1)	2(1.5)	36(27.7)	14(10.7)	14(10.7)	0(0.0)	2(1.5)
大	男	58	20(34.5)	1(1.7)	13(22.4)	17(29.3)	7(12.2)	0(0.0)	0(0.0)
	女	96	37(38.5)	0(0.0)	35(36.5)	18(18.8)	3(3.1)	2(2.1)	1(1.4)
学	計	154	57(37.0)	1(0.6)	48(31.2)	35(22.8)	10(6.5)	2(1.3)	1(0.6)
地	男	103	47(45.6)	2(1.9)	44(42.7)	1(1.0)	2(1.9)	4(3.9)	3(2.9)
	女	82	39(47.6)	0(0.0)	19(23.2)	1(1.2)	0(0.0)	23(28.0)	0(0.0)
域	計	185	86(46.5)	2(1.2)	63(33.9)	2(1.1)	2(1.1)	27(14.6)	3(1.6)



図－7



図－8

◉分析，考察 (1)（学校・地域）

① いずれの類型においても，年齢が第1位で第2位は地位となっている．年齢，地位を合わせると，地は80%，高と大でも70%前後となっており，敬語使用を左右する最優先条件であることがわかる．

② 「A」（年齢）と「C」（地位）との回答率が近いことは両方が重ねられている場合が多いので，どちらが優先するかという判断は厳密には難しいと思われる．

③ 地の女性において「F」が高いことが注目される．女性は年齢の次に，親疎関係を重視することが特徴的であった．

④ 各類型，あまり気を配らない相手としては，まず性別で，次いで親疎，先輩か後輩かなどがあげられ

る．

◉結果 (2)（職場）

① 表－6と図－8に示したように「C．職階」と答えた人は各類型とも多く，特に会社甲と官公庁丁は70%前後になっている．

② 「A．年齢」の答えで比較して見ると，官公庁丙の男性が45.5%と特に高く，次いで官公庁丁の女性の33%と高いのが特徴的である．

③ 性別，先輩か後輩か，親疎と答えた人は極めて少ない．

④ 性別を見ると，会社乙と官公庁丙の女性は職階を選んだ人が男性より多く見られる．反面，男性は女性より年齢と答えた人が多い．

表－6　最も気を配る相手の条件（会社・官公庁）

類型	性別	人数	A	B	C	D	E	F
会社甲	男	32	3(9.4)	2(6.3)	24(75.0)	2(6.3)	1(3.1)	0(0.0)
	女	14	3(21.4)	0(0.0)	10(71.4)	1(7.1)	0(0.0)	0(0.0)
	計	46	6(13.0)	2(4.3)	34(73.9)	3(6.5)	1(2.2)	0(0.0)
会社乙	男	37	11(29.7)	1(2.7)	22(59.5)	3(8.1)	0(0.0)	0(0.0)
	女	7	0(0.0)	0(0.0)	6(85.7)	1(14.3)	0(0.0)	0(0.0)
	計	44	11(25.0)	1(2.3)	28(63.6)	4(9.1)	0(0.0)	0(0.0)
官公丙	男	44	20(45.5)	2(4.5)	22(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	女	17	2(11.6)	0(0.0)	11(64.7)	2(11.8)	1(5.9)	1(5.9)
	計	61	22(36.1)	2(3.3)	33(54.1)	2(3.3)	1(1.6)	1(1.6)
官公丁	男	34	7(20.6)	1(2.9)	25(73.5)	0(0.0)	1(2.9)	0(0.0)
	女	3	1(33.3)	0(0.0)	2(66.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	計	37	8(21.6)	1(2.7)	27(73.0)	0(0.0)	1(2.7)	0(0.0)

◉分析，考察 (2)（職場）

① 職場の敬語使用では，年齢より職階に気を配ることが定着していると言えよう．敬語使用の基準として，相手の職階との上下意識が大変強く働いていることがはっきりとわかる．

② 官公庁丙で年齢と答えた比率がやや高い理由として昔ながらの年功序列制の考え方や，転勤がなく，長く同じ所に勤めることとも関係があるかと思われる．

◉結果と分析，考察 (3)（全体）

職場の結果を学校，地域の結果と比べて見ると，学校と地域の生活の中で敬語を使う時，相手に最も気を配るのは年齢であるのに対して，職場では職階が年齢より気を配られている．これは地域社会における社会的階層と利益社会における職階との成立条件の相違によると思われる．

(5) 敬語使用の条件について（学校，地域向けの問－4）

◉設問，結果

下にあげた敬語に関する(1)～(6)の意見について，あなたはどう思いますか．

(1) 友人などへの敬語は，よそよそしい感じがする．
(2) あまり親しくない人には，敬語を使う方がよい．
(3) 目上の人には，敬語を使う方がよい．
(4) 目下の人には，場合によっては敬語を使う方がよい．
(5) 年上の人には，敬語を使う方がよい．
(6) 年下の人には，場合によっては敬語を使う方がよい．

A．そう思う．
B．どちらともいえない．
C．そうは思わない．
D．分からない．

調査結果は表－7と図－9～20のとおりである．

① 「そう思う」（同意率）が最も高いのは「(3) 目上の人には敬語を使う方がよい」で，全体的に高く，高80％前後，大，地は90％前後となっている．次は「(5) 年上の人には敬語を使う方がよい」で，高，大は65％前後，地は80％を越えている．「(1) 友人などへの敬語はよそよそしい感じがする」の同意率が高，大は85％前後で，地は67％である．「(4) 目下の人にも場合によっては敬語を使う方がよい」と「(6) 年下の人にも場合によっては敬語を使う方がよい」に対して，「そう思う」の回答率は高は40％前後で，大は65％程度，地は70～80％となっている．最も低いのは「(2) あまり親しくない人には敬語を使う方がよい」で高，大とも低く，過半数になっていないが，地は63％であった．

各項目に対する同意率には性別による差は少ない．

② 各項目に対する同意率と反対率を各類型別及び性別．年齢別に見ると，次のような特徴が見られる．

a．「友人などへの敬語は，よそよそしい感じがする」

高，大と地の20代の人は圧倒的な同意率で，30代以上の男性は女性より高く見られる．反対率は30代以上の人は1割前後で，60代の女性が割に低い．

b．「あまり親しくない人には，敬語を使う方がよい」

同意率は，高，大では，男性が女性より1．2割高く，地では，年齢や性別による差が小さい．反対率は全体に低いが，「どちらとも言えない」は割に高く，高は40％を越えている．

c．「目上の人には敬語を使う方がよい」

同意率はいずれの年代でも高いが，高は大，地より1割低い．地の30．40代男性は全体よりやや低い．反対率は全体が極低い．

d．「目下の人にも場合によっては敬語を使う方がよい」

同意率は年齢による差が少ない．ただ40代の男性は同年齢女性より2割以上低いのが目立つ．「どちらとも」と「思わない」は高が多い．

e．「目上の人には敬語を使う方がよい」

全体を見て，同意率は年齢別の差は少ないが，男女別では，地の男性は女性よりやや多い．

f．「目下の人にも場合によっては敬語を使う方がよい」

高，大の同意率は女性が男性より高く，反対率は高と大の男性が高く見られる．「どちらとも」は地の20．40代の男性と50．60代の女性が高い．

◉分析，考察

① (1)と(2)は親疎関係における敬語使用の選択に関する質問である．上記の結果を見て，10代後半，20代

は親しい関係においては敬語を使わないとしている人が圧倒的に多いが，疎い関係について気を配る人は少ない．逆に地は疎の関係も意識しているのが特徴的である．疎い関係を意識している人の少ない高，大は社会経験不足が原因であろう．

(1)の地の結果（同意率）は先行の調査結果よりやや低い．（前調査の同意率は74%）

(2)は前調査の結果とほぼ同じであった．（前調査の同意率は62%）

② (3)，(4)の目上と目下及び(5)，(6)の年上と年下は，上下関係に関して尋ねたものである．普通，目上と年上の人に敬語を使い，目下と年下の人に敬語を使わないのが基本原則と考えられるが，依頼するとき，あらたまりなどの場面では，目下と年下の人に敬語を使う可能性があると仮定して，これらの質問を設けた．

(3)の同意率が全体的に高いのは予想どおりであった．前調査の結果とほぼ同じである．（前調査の同意率は91%）この結果から日本人は目上の人への言葉使いに最も気を配ると言えよう．

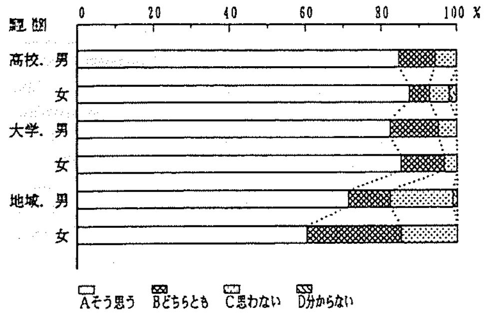
(5)の同意率は高，大が65%前後で，年上の人に敬語を使う意識はそれほど高いとは言えないだろう．

(4)と(6)は「場合によって」を条件として，「目下と年下の人にも敬語を使う方がよい」に対して，高の同意率は40%前後で地の半分近くなのは注目される．これも若年層が社会経験不足（生活形態が単純であり，対人関係が限られていることなど）で，敬語を使うときに場面の意識が薄いことが原因と思われる．

表ー7　敬語使用の条件について（学校・地域）

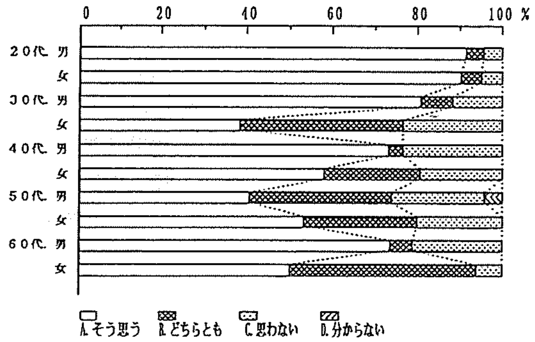
意見 ＼ 選択肢 ＼ 類型		高校			大学			地域		
		男 93	女 113	計 206	男 85	女 124	計 209	男 126	女 96	計 222
(1)	A	79(84.9)	99(87.5)	178(86.4)	70(82.4)	105(84.7)	175(83.7)	90(71.4)	58(60.4)	148(66.7)
友人などへ	B	9(9.7)	6(5.3)	15(7.3)	11(12.9)	15(12.1)	26(12.4)	14(11.1)	24(25.0)	38(17.1)
の敬語はよ	C	5(5.4)	6(5.3)	11(5.3)	4(4.7)	4(3.2)	8(3.8)	21(16.7)	14(14.6)	35(15.8)
そよそしい	D	0(0.0)	2(1.8)	2(1.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1 (0.8)	0(0.0)	1(0.5)
(2)	A	42(45.2)	28(24.8)	70(34.0)	45(52.9)	55(44.4)	100(47.8)	81(64.3)	59(61.5)	140(63.1)
あまり親し	B	33(35.5)	54(47.8)	87(42.2)	28(32.9)	52(41.9)	80(38.3)	34(27.0)	28(29.2)	62(27.9)
くない人に	C	18(19.4)	26(23.0)	44(21.4)	12(14.1)	16(12.9)	28(13.4)	9(7.1)	8(8.3)	17(7.7)
は敬語を	D	0(0.0)	5(4.4)	5(2.4)	0(0.0)	1(0.8)	1(0.5)	2(1.6)	1(1.0)	3(1.4)
(3)	A	74(80.0)	89(78.9)	163(79.1)	73(85.9)	112(90.3)	185(88.5)	109(86.5)	90(93.8)	199(89.6)
目上の人に	B	12(12.9)	18(15.9)	30(14.6)	7(8.2)	11(8.9)	18(8.6)	16(12.7)	6(6.2)	22(9.9)
敬語を	C	4(4.3)	4(3.5)	8(3.9)	2(2.4)	1(0.8)	3(1.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	D	3(3.2)	2(1.8)	5(2.4)	3(3.5)	0(0.0)	3(1.4)	1(0.8)	0(0.0)	1(0.5)
(4)	A	34(36.6)	42(37.2)	76(36.9)	52(61.2)	84(67.7)	136(65.1)	86(68.3)	70(72.9)	156(70.2)
目下の人	B	27(29.0)	36(31.9)	63(30.6)	9(10.6)	22(17.7)	31(14.8)	32(25.4)	14(14.6)	46(20.7)
にも敬語	C	21(22.6)	23(20.4)	44(21.4)	21(24.7)	15(12.1)	36(17.2)	6(4.8)	10(10.4)	16(7.2)
	D	11(11.8)	12(10.6)	23(11.2)	3(3.5)	3(2.4)	6(2.9)	2(1.6)	2(2.1)	4(1.8)
(5)	A	64(68.8)	69(61.1)	133(64.6)	58(68.2)	83(66.9)	141(67.5)	109(86.5)	73(76.0)	182(82.2)
年上の人に	B	18(19.4)	32(28.3)	50(24.3)	20(23.5)	37(29.8)	57(27.3)	14(11.1)	21(21.9)	35(15.8)
敬語を	C	9(9.7)	10(8.8)	19(9.2)	6(7.1)	4(3.2)	10(4.8)	3(2.4)	2(2.1)	5(2.3)
	D	2 (2.2)	2(1.8)	4(1.9)	1(1.2)	0(0.0)	1(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
(6)	A	35(37.6)	49(43.4)	84(40.8)	51(60.0)	87(70.2)	138(66.0)	101(80.2)	77(80.2)	178(80.2)
年下の人に	B	19(20.4)	27(23.9)	46(22.3)	16(18.8)	26(21.0)	42(20.1)	19(15.1)	16(16.7)	35(15.8)
も敬語を	C	30(32.3)	29(25.7)	59(28.6)	15(17.6)	9(7.3)	24(11.5)	6(4.8)	3(3.1)	9(4.1)
	D	9(9.7)	8(7.1)	17(8.3)	3(3.5)	2(1.6)	5(2.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

問－4 (1) 友人などへの敬語 （学校．地域の性別）



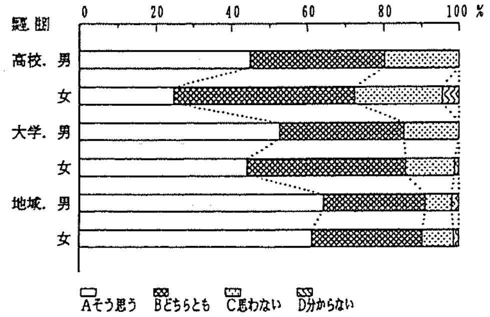
図－9

問－4 (1) 友人などへの敬語（地域の性別．年齢別）



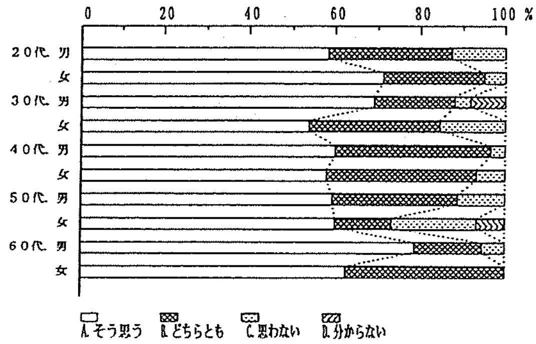
図—10

問－4 (2) あまり親しくない人に敬語を（学校．地域の性別）



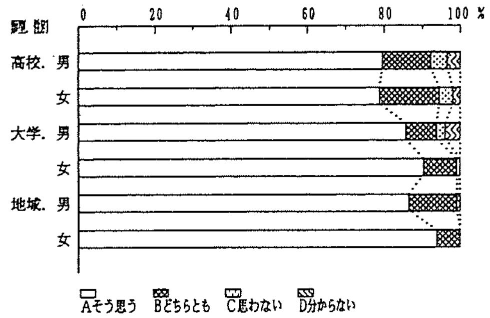
図—11

問－4 (2) あまり親しくない人に敬語を（地域の性別・年齢別）



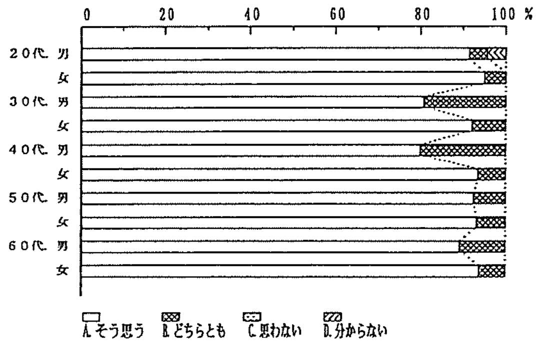
図—12

問－4 (3) 目上の人に敬語を（学校．地域の性別）



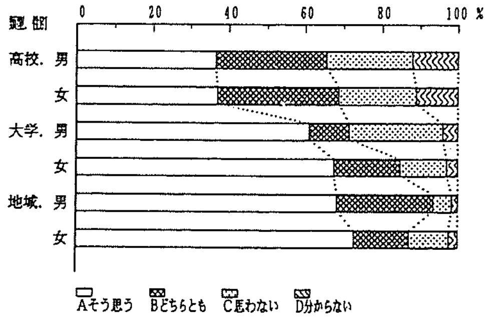
図—13

問－4 (3) 目上の人に敬語を（地域の性別・年齢別）



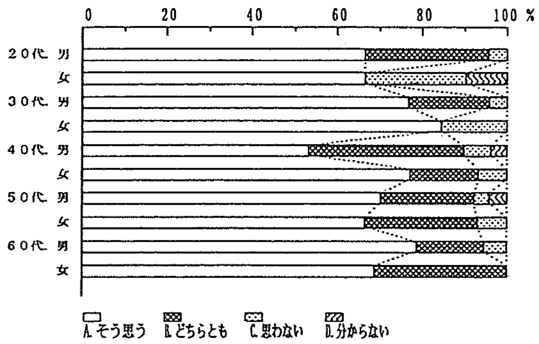
図—14

問－4 (4) 目下の人にも敬語を（学校．地域の性別）

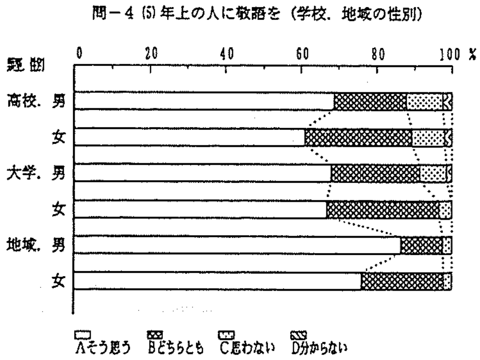


図—15

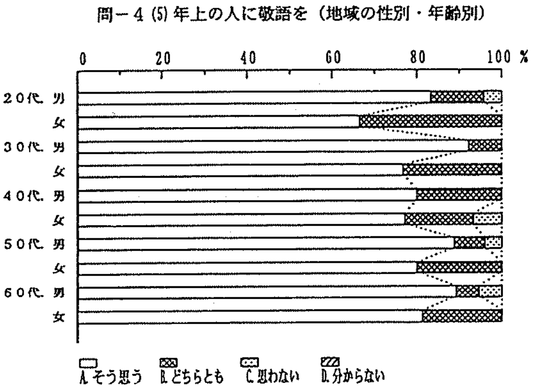
問－4 (4) 目下の人にも敬語を（地域の性別・年齢別）



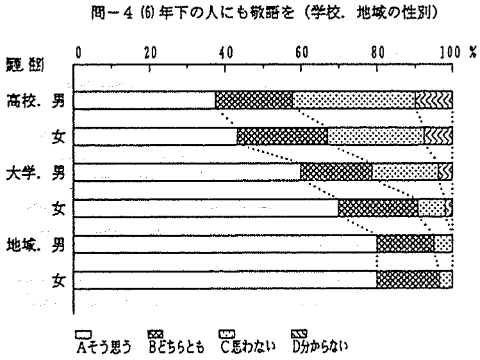
図—16



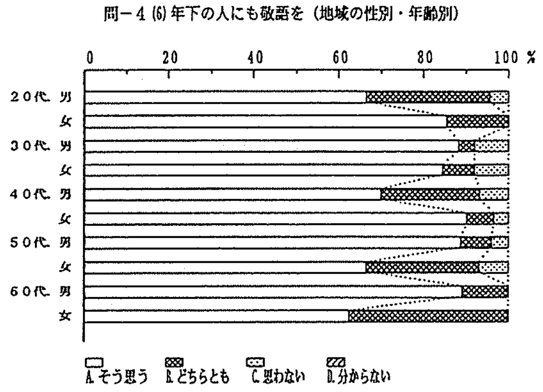
図—17



図—18



図—19



図—20

(6)の同意率は前調査と比較すると，１割近く高い．（前調査の同意率は71．4%）

③　全体の調査結果は地では親疎関係についても上下関係についても気を配る人が多く，また場面を意識した言葉選びを支持する人も大多数なのに比し，高と大は親疎と場面に対する意識の低い面が見られる．

(6)　将来の敬語への意見（学校，地域向けの問—12）

◉設問，結果

> あなたは，今後，敬語はどうなったらよいと思いますか．下記からあなたの考えに最も近いものを選んでください．
>
> １．昔のように，きちんとした方がよい．
> ２．いまのままがよい．
> ３．もっと簡素にした方がよい．
> ４．どちらとも言えない．
> ５．わからない．

調査結果は表－８及び図－21，22のとおりである．

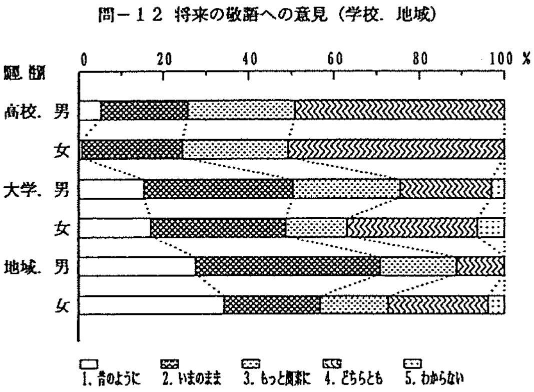
①　高は男女とも「4．どちらとも言えない」が最高値を示したが，「2．いまのまま」と「3．もっと簡素にした方がよい」に分散して，「1．昔のように」は極めて少ない．

②　大は男女とも一応「2．いまのまま」が最高値を示しているが，１，３，４が15〜30%と分散している．

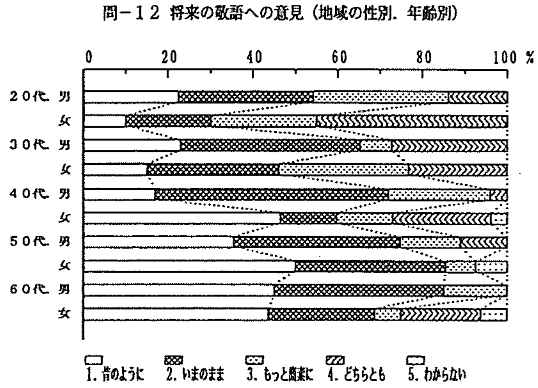
③　地は男女で異なり，男は「2．いまのまま」が最高値であるが，女は「1．昔のように」が高い値となっている．そして男女とも１，２，３，４と広く分散している．

表－8　将来の敬語への意見

類型	性別	人数	1. 昔のように	2. いまのまま	3. もっと簡素に	4. どちらとも	5. 分からない
高	男	92	5(5.4)	19(20.7)	23(25.0)	45(48.9)	0(0)
	女	113	1(0.9)	27(23.9)	28(24.8)	57(50.4)	0(0)
校	計	205	6(2.9)	46(22.4)	51(24.9)	102(49.8)	0(0)
大	男	83	13(15.7)	29(34.9)	21(25.3)	18(21.7)	2(2.4)
	女	123	21(17.1)	39(31.7)	18(14.6)	38(30.9)	7(5.7)
学	計	206	34(16.5)	68(33.0)	39(18.9)	59(27.2)	9(4.4)
地	男	127	35(27.6)	55(43.3)	23(18.1)	14(11.0)	0(0)
	女	93	32(34.4)	21(22.6)	15(16.1)	22(23.7)	3(3.2)
域	計	220	67(30.5)	76(34.5)	38(17.2)	36(16.4)	3(1.4)



図―21



図―22

④　地の性別，年齢別の図－２２によると，「１」の回答者の中には，20.30代の女性が10％ぐらいで，男性より少ないが，40代になると激増し50％に近付いている．男性も40代以上が高く見られる．

「２」は，男性は女性より２割多い．「３」，「４」は，若年層の方が高年層より高い．特に20代の女性は「どちらともいえない」の選択率が45％となっている．

◉分析，考察

①　高では「昔のようにきちんと」が極めて低いのは，「昔」を知らないから当然であろう．

②　「昔のように」については年令層によって意見がかなり異なって，高年層は半数近い人が昔の敬語の方が望ましく思っている．

③　地の結果によると，「昔のように」と「いまのまま」を加えて，全体で65％程度になり，主流であるが，その中50代以上の人は80％の高率で，若年層と対照的になっており，注目すべきである．

④　「どちらともいえない」が高で特に高いのは，やはり社会生活上の未成熟（経験不足）を意味すると思われる．まだ敬語使用に迷っている人が多いと言えよう．

⑤　将来の敬語についての意見として，簡素化を望む人は全体で２割前後であり，多いとは言えない．

⑥　全体の結果から見ると，各回答数は分散し過半数に達しないことから，敬語の将来に対する判断と予測の難しさが見られる．

(7) 職場内敬語の将来への意見（職場向けの問－8）

◉設問，結果

> 将来，職場の中での敬語はどのようになっていったらよいと考えますか．あなたの考えに近いものを一つ選んでください．
>
> 1．現在よりもっときちんとしたものになるとよい．　　2．現在の程度がよい．
>
> 3．現在よりもっとゆるやかなものになるとよい．　　4．なくなった方がよい．

前出の問－1（職場向け）で，職場内敬語の現状への意識を問うのと並行して，職場内敬語の将来についての意見をたずねた．この項目の調査結果も国立国語研究所の先行の調査結果と比較できる．

調査結果は表－9及び図－23のとおりである．

① 各類型とも回答率が一番高いのは「2．現在の程度」で，ほとんどが60%以上の高率であった．性別で見ると官公庁丁以外は女性の方が男性より高い．

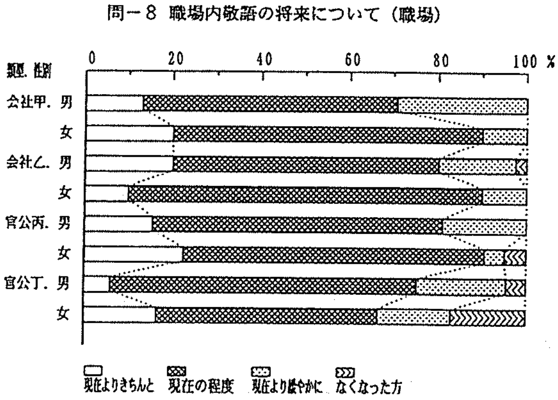
② 「1．もっときちんと」が全体的に1，2割程度であるが，「2，現在の程度」と合わせると，80%を超えている．

③ 「3．もっとゆるやかなもの」は全体として2割に満たず，男性より女性の方が低い．

④ 「4．なくなった方」の支持率は全体に極めて低い．

表－9　職場内敬語の将来

類型	性別人数	1	2	3	4
会	男38	5(13.2)	22(57.9)	11(28.9)	0(0.0)
社	女20	4(20.0)	14(70.0)	2(10.0)	0(0.0)
甲	計58	9(15.5)	36(62.1)	13(22.4)	0(0.0)
会	男40	8(20.0)	24(60.0)	7(17.5)	1(2.5)
社	女10	1(10.0)	8(80.0)	1(10.0)	0(0.0)
乙	計50	9(18.0)	32(64.0)	8(16.0)	1(2.0)
官	男58	9(15.5)	38(65.5)	11(19.0)	0(0.0)
公	女22	5(22.7)	15(68.2)	1(4.5)	1(4.5)
丙	計80	14(17.5)	53(66.3)	12(15.0)	1(1.3)
官	男49	3(6.1)	34(69.4)	10(20.4)	2(4.1)
公	女 6	1(16.7)	3(50.0)	1(16.7)	1(16.7)
丁	計55	4(7.3)	37(67.3)	11(20.0)	3(5.5)



図―23

◉分析，考察

① 学校，地域の結果と違って，職場の敬語についての意見は「現在の程度」に集中し，全体的にほぼ同じ意見を持っている．

② 「現在の程度」に「現在よりもっときちんと」を加えれば圧倒的な多数になって，現在の職場敬語に肯定的態度が見られる．

③ 1975～1977年の国立国語研究所による日立製作所での先行の調査の「もっときちんと」25.8%，「今程度」62.3%，「もっとゆるやか」8.4%，「なくなった方」11.3%，その他2.1%という全体結果に比べて，

大きな違いが見られない．この結果から20年経っても，職場の敬語への意見があまり変わっておらず，これからの職場内の敬語は現在の状態が続くものと予測される．

4　おわりに

1．敬語使用の適切さについての自己評価の結果は，地域住民，高校生，大学生ともに，「適切に使っている」と「人並みに使っている」を合わせると，約70%となっている．しかし自信を持って「適切に使っている」に限ると，10%前後に止まっている．さらに「使いたいと思うが，十分に使っていない」人は30%前後に上っている．要するに，地域と学校では，敬語を「人並み」に使用していると意識しながらも，敬語がきちんと使えていると自信を持つ人は比較的少数で，日本人自身にも敬語の使い方は難しいことがうかがわれる．

2．現在の職場の敬語が仕事のために不可欠かどうかについては，全体的には不可欠とする人が約90%と圧倒的に多い．20年前の調査より増える傾向が見られる．

3．自分が所属する生活の場面で敬語に気を配るかどうかについて，高校生と大学生は地域住民より敬語への留意度が低い．この理由は学校生活では人間関係が比較的単純であり，地域での上下，親疎など多様で複雑な人間関係と違うからであろう．

4．職場での敬語への留意度について，会社では留意度が高く，大学事務局のような官公庁では割合に低いのは，サービス対象の違いや相手との利害関係などの違いと相関するからであろう．

5．敬語使用に気を配る相手について，学校，地域社会いずれの類型も年齢が第１位で，第２位は地位となっている．ただし年齢と地位は重なりあう場合が多いので，単純に比較することは難しいと思われる．強調すべきは，地域住民の女性は親疎関係依存の回答率が高いことである．ここには社会構造の変化と都市化の進行にともない，親疎関係が敬語使用の条件になっているという現代日本語の特徴が反映されている．

6．職場の敬語で気を配る相手についての回答は，職階に集中している．職場では，地域社会と違って職階が敬語意識，敬語使用に強くかかわることが裏付けられた．

7．敬語使用において上下（地位，年齢など）関係に加えて，親疎関係が重要な条件としてあげられるが，地域社会の人に比べて，高校生，大学生は親疎関係への判断と対応に弱いという特徴が見られる．

8．将来の職場敬語のあるべき姿に関する意見について，全体として現状維持派が60%以上を占め，現在のものよりきちんとした敬語を求める意見と合わせると圧倒的な多数にのぼっている．現在の職場敬語に対して肯定的，保守的な態度が示されており，今後の職場内敬語は現在の状態が続くものと予測される．

9．敬語の将来について，高校生は半数近くが「どちらともいえない」と答えている．大学生は「昔のように」と「いまのまま」を合わせたものが半数近くを占める．地域社会の意見は年齢，性別で大きく分かれ，年齢が上がるにつれて保守的な態度が見られる．40代以上の女性は「昔のように」の支持率が40%を超えて，男性は全体的に「いまのまま」の同意率が40%以上になっている．

地域住民は「昔のように」と「いまのまま」を加えた復古派と保守派が大多数となっている．敬語の将来については，年齢の低い層の意識が重要な要素と考えられるが，加齢とともに意識が変化することも考慮しなければならず，この結果からの予測は困難である．

実施した調査のうち，「敬語行動」の部分については別の機会に発表したい．今回の調査結果を敬語の指導法にどう生かすかが今後の重要な課題であると考える．

参考文献

・国立国語研究所（1957）『敬語と敬語意識』（国立国語研究所報告11）秀英出版
・国立国語研究所（1983）『敬語と意識―岡崎における20年前との比較―』（国立国語研究所報告77）三省堂
・国立国語研究所（1982）『企業の中の敬語』（国立国語研究所報告73）三省堂
・文化庁（1995）『国語に関する世論調査』大蔵省印刷局
・杉戸清樹（1979）「職場敬語の―実態―日立製作所での調査―」（『言語生活』328号）筑摩書房
・柴田武監修，荻野綱男他(1980)『都市の敬語の社会言語学的研究―昭和53年度札幌における敬語調査報告―第１部．第２部』文部省特定研究「言語」総括班
・大石初太郎（1981）「現代敬語の特質，その将来」（『講座日本語学９敬語史』）明治書院
・東京大学敬語研究会（1982）『続・都市化と敬語―昭和52年度札幌における敬語調査報告』
・文化庁(1996)『新「ことば」シリーズ４　言葉に関する問答集―敬語編(2)―』

小論におけるアンケート調査には多数の方々にご協力いただきました．この場を借りて深く御礼申し上げます．
小論は胡が執筆し，三上が指導助言を与えたものである．

三上勝夫（本学教授札幌校）
胡　躍華（本学大学院修士課程二年）